特 集

現代社会における家族ならびに結婚の意味を問う

Part III 現代家族の存在意義を問う

家族問題研究からみた現代家族の意義と意味

——保健機能と自分物語——

清 水 新 二

要 約

家族の多面的リアリティに即して、「ストレス発生の場」としての“おそろしい家族”の側面と、「ストレス緩和の場」としての家族保健機能の両面から、さらに自分物語を構築するという上での関係性の観点から、現代家族の意義と意味を検討した。具体的データを参照しつつこの検討を通じて、なぜ夫婦/パートナー、家族関係が人々の間で「一番大切なもの」と意識されるのかを実利的ならびに意味の観点から論じた。私事化、高齢社会という社会的背景を考慮すると、夫婦/パートナー、家族がコンボイとしてなおしばらくは中核を占めることが考察された。

キーワード：家族問題、家族保健、コンボイ、自己物語

2005, 家族社会学研究, 16(2): 47-60

What Does the Family Problem Research Imply for Significance and Meaning of the Contemporary Families ?

——Health Function and Construction of Self Stories——

Shinji Shimizu

Abstract

Significance and meaning of the contemporary families in Japan is considered by examining some empirical data on health, showing stress producing as well as stress buffering, respectively. The speculated reasons why people consider marital or family relations as the primary source of identifying themselves is discussed. Firstly, pragmatic advantages of well-being held by the married over other marital status in the current modern social system are focused. Meanwhile, people are more likely to recognize and pursue the insistent and increasing importance of close relations, marital or partner relationship among others, for construction of their own self stories in their contemporary life course. This tendency is provided with push through the social process of privatization and extended longevity after the empty nest.

Key words: family problems, family health, convoy, self story

2005, Japanese Journal of Family Sociology, 16(2): 47-60

はじめに

今回のシンポジウム企画者の意図するところは、家族の本質論や普遍性論議は避けて現代家族の意義ないしは意味を探る、というものである。そこで最初に議論の土俵を明確にしておきたい。前2回のシンポジウムのテーマ、論点との重複を避けるため、また私自身がそれに関するデータを持っていないことから、これから結婚する人々をメインターゲットとする議論でなく、制度的か非制度的かを問わず現に結婚を選択し家族を持っている人に関する検討をこれまでの研究結果を基に試みることである。

もう一つ断っておきたい危惧がある。それはこのシンポジウムを含めて現代家族の意義を論じること自体が、「現代」ないしは「近代」家族の意義を再度強調するというバックラッシュ的な構えではないかと警戒されることである。シンポジウム企画者にも筆者にもそうした意図はないのだが、あえてそう指摘する必要があるほどに、いささか窮屈な家族研究状況にあるように思われる。

1. 家族のリアリティの多面性

家族のリアリティが多面的で複層的であることは言うまでもない。男と女によって、ライフサイクルやライフコースによって、ひいては個々人によって家族という生活世界の意味と文脈は異なっている。「標準的家族」批判（＝形態としての核家族、家族理念としての夫婦制家族への批判や疑問と思われる）は、一つにはこの事実に基づいてなされるものであろう。家族もストレス緩和の場であるとともにストレス発生のある場でもある、複層的な生活世界であることは同様である。

従前からの各種世論調査や全国調査が提示してきた家族への人々への主な期待、重要視する内容・意味が「休息と憩いの場」「団らん」「愛情と和合の場」（総理府調査、統計数理研究所国民性調査、全国紙による世論調査など）といったものである一方、家族病理学や家族精神医学、家族

臨床や家族問題論では早くから家族が各種の成員間葛藤や問題、ストレス発生のある場であることを繰り返し研究してきた軌跡がある（清水，1998）。とりわけ家族精神医学では「分裂病をつくる母親」「アル中をつくる妻」「神秘的欺瞞」概念から、最近ではEE（Expressed Emotion）研究、アダルトチルドレン等々、次から次に大きくは家族成因論と総括できるような研究を紡ぎだしてきた。これらの領域では、家族がストレス発生のある場であることは常識といえるほどに共有された家族のリアリティ認識である。ではなぜ人々はさっさと離婚しないのだろうかとの単純にすぎる問かけに関しては、十分な警戒心をもって語られるべき共依存の概念さえ提起されてきた（清水，2001a）。

筆者も長らくこの分野での研究を続けてきた者であり、家族臨床にも深く関与してきた経験から「家族は〈ストレス解消の場〉や〈自分でいられる居場所〉どころか、〈ストレス発生のある場〉であったり〈自分を見失う場〉であったりする」と述べたことがある（清水，2000a）。本稿ではそうした立場から、上記のような家族的世界の両面に目配りしつつ、臨床場面に出てくる家族のみならず多数の現代日本人がなぜに離婚でもなく未婚でもなく、なお家族を選択し継続するのかを自問する形で論じてみたい。無論、離婚、未婚、同性婚、非婚もあっていい。結婚や家族などなくとも一向に構わない。ただ結婚や家族がそうした選択肢の中のひとつとなりつつある現代にあって、あえて多くの人々がそれを選択する場合、その理由を考えてみる意義はそれとして大きく、重要と考える。

2. こわい家族

どうす黒く抑圧的で権力的な家族の一面を、アディクション、共依存、ドメスティック・バイオレンス、インセスト、アダルトチルドレンなど多面的な臨床家族研究を通じて、「家族はこわい」とワンフレーズ化してみせたのは精神科医の斉藤学（1997）である。鋭くかつ大胆な慧眼である。同様に信田（2003）も、治療戦略上とはいえ、「こん

表 1 深酒の最もひどかったときの夫婦関係

地域・頻度 項目		東京 (%、N=170)					高知 (%、N=67)				
		よく あった	ときには あった	全く なかった	N.A.	計	よく あった	ときには あった	全く なかった	N.A.	計
信頼	身近な出来事について話し合う	14.7	45.3	37.6	2.4	100.0	13.4	56.7	26.9	3.0	100.0
	何でも打ち明けて話をする	14.7	39.4	44.1	1.8	100.0	13.4	55.2	28.4	3.0	100.0
	夫は良き理解者であると思う	8.8	31.8	57.6	1.8	100.0	11.9	38.8	44.8	4.5	100.0
嫌悪・拒絶	お互いに口をきかない	40.6	45.3	13.5	0.6	100.0	35.8	52.2	9.0	3.0	100.0
	夫の顔を見るのもいやだと思う	58.8	35.9	4.7	0.6	100.0	53.7	35.8	6.0	4.5	100.0
	夫を避けて別に寝る	45.9	38.2	14.7	1.2	100.0	37.3	43.3	16.4	3.0	100.0
	とても一緒にはやっていけないと思う	64.7	31.2	4.1	0.0	100.0	53.7	37.3	6.0	3.0	100.0
	相手をなじったりののしりあう	53.5	37.6	8.2	0.6	100.0	56.7	31.3	9.0	3.0	100.0
破壊	夫をしめ殺したいと思う	26.5	42.9	30.6	0.0	100.0	16.4	44.8	31.3	7.5	100.0
	自殺したいと思う	22.9	42.9	34.1	0.0	100.0	16.4	41.8	37.3	4.5	100.0
離婚	離婚さわぎを起こす	26.5	51.8	21.2	0.6	100.0	22.4	55.2	20.9	1.5	100.0
暴力	夫からなぐる、けるの暴力を受ける	25.9	39.4	34.1	0.6	100.0	19.4	49.3	26.9	4.5	100.0

な自分に誰がした」と親を糾弾することをアダルトチルドレンに奨める。冒頭に述べた「ストレス発生場」としての家族に対応するリアリティ認識である。

筆者も同様の家族臨床的アプローチによる研究を続けてきた立場から、齊藤ほど鋭く大胆ではないもの、類似の認識を共有している(清水, 2000 a)。筆者ばかりではなく、家族病理学や家族問題論の関係者であるならば、こうした認識が多かれ少なかれ共通理解となっていることは冒頭に述べたとおりである。あまりに家族「論」ばかりでは気がひけるので、少々そうした理解を裏づける自身の研究データについてごく簡単にその一端を示してみたい。

1) アルコール依存症家族研究

かれこれ 25 年ほど前の調査結果であるが、筆者がアルコール依存症家族の研究にのめり込む契

機となった断酒会家族調査の結果の一つが表 1 である。私たちどの夫婦にもこれらの項目の一つや二つはあるものだが、このストレッサー/ストレスの常態性に加え、アルコール依存症夫婦の場合はその高頻度、かつ同時多発的ストレッサーの発生が特徴といえる。この特徴は東京、高知の地域差を越えて共通している。当時の調査では妻たちのストレス度は測定しなかったものの、断酒会例会における彼女たちの語りからしても大変なストレス状況にあることは想像に難くない。

表 2 はそうした妻たちの心理的ストレス度を、CMI (Cornel Medical Index: 世界各国で広く使われている自記式神経症判別テスト) 尺度を使って観察した臨床調査結果である(清水, 1992)。対象は当時筆者がアルコール専門外来クリニックにおいて担当していた家族グループ・ミーティングの参加者である。アルコール依存症の妻たちは、「神経症と判定すべし」の第 IV カテゴリーお

表 2 CMI 得点による神経症判別結果（深町の判別基準による）

	I	II	III	IV	(N)
アルコール依存症の妻					
S ₁ （初診時）	31.0	27.6	24.1	17.1	(87)
S ₂ （ミーティング終了時）	27.7	28.7	29.8	13.8	(94)
健常者					
デパート従業員 ¹⁾	35.5	36.8	24.1	3.8	(1599)
内科外科患者 ²⁾	38	37	22	3	(100)
神経症者					
内科外科患者 ²⁾	8	17	37	38	(100)

注) 1) 安藤(1966)

2) 深町(1959)

よび「神経症と判定した方が間違いは少ない」第 III カテゴリーにおいて、当然のこと神経症患者群よりは該当者比率は低いものの、明らかに一般他科の受診者よりは異常に高いことが明らかにされた。

2) ドメスティック・バイオレンス

夫婦の痴話喧嘩から女性に対する重大な人権侵害へと、社会の問題認識が大きく転換したドメスティック・バイオレンス（以下 DV）も、こわい家族を端的に示すもう一つの事例である。スノーボール・サンプリングから無作為抽出全国サンプル調査に展開するなど、DV に関する関心は次第に方法的にも理論的にも、運動・行政調査型から学術調査型の研究に展開し始めている。これを追って、家族社会学研究領域でも学術的な調査研究は態勢を整え始めている（庄司ほか，2003；清水ほか，2004）。

無作為抽出により 20 歳から 69 歳の成人を対象にした筆者の全国調査の結果をみると、男女とも半数以上の回答者（配偶者/パートナーありの者のみ）が去年 1 年間に「言葉による攻撃」を経験しており、この他「精神的暴力」（男子：女子，8.5%：11.0%），「経済的暴力」（男子：女子，10.2%：9.0%），「性的暴力」（男子：女子，2.3%：4.7%），「身体的暴力」（男子：女子，8.5%：7.9%），そしてこれらを総合した暴力全体で見ると男子：女子それぞれが 66.0%：57.4%が DV 被

害の自己申告¹⁾をしている（清水ほか，2004）。さらに DV の中でも中核にある最も激しい身体的暴力（この 2 年間）では、被害で男子 8.3%，女子 11.1%，加害でも男子 10.9%，女子 10.3%がそれぞれ自己申告している。ただし医療的手当の必要なほどの甚大な被害は男子が 1.3%に対して、女子は 7.7%にも達している（表 3）。

自らの生殖家族において暴力加害者である者ほど定位家族において 16 歳以前に親世代の家族的暴力シーンを目撃した頻度が高く、次いで被害・加害者双方の者、そして暴力被害者と続く。全く同様のことは自らが（児童）虐待を受けた被害頻度に関してもいえる（表 4 参照）。以上のことは男女別に集計しても全く同様の結果であった。いわゆる世代間連鎖に関連する問題であるが、同時に注意すべきは DV の加害者でも被害者でもない人でさえも家族暴力を目撃したり、実際に被害を受けた体験が少なくないことである。おそろしい家族の世代間連鎖の問題はさらに検討が加えられるべき複雑なテーマでもある。

3. 家族の保健機能

「休息と憩いの場」「団らんの場」「愛情と和合の場」など、人々が家族に寄せる期待にもかかわらず、現実の家族はどす黒いもう一つの世界と背中合わせでもあることがわかる。では人々が家族に寄せる期待は単なる幻想、願望でしかなく、根拠のないものだと言い捨てることが可能であろう

表 3 最も激しい身体的暴力被害に関する国際比較

	日本		英国		ナイジェリア		スリランカ		アルゼンチン		カナダ ¹⁾	
回答者性別	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
身体的暴力の有無												
被害あり	8.3	11.1	18.4 ²⁾	14.0 ²⁾	11.6	13.3	1.7	7.4	15.9 ²⁾	10.5 ²⁾	11.9	7.0
加害あり	10.9	10.3	13.0 ²⁾	16.5 ²⁾	12.4	9.3	6.5	1.6	9.5 ²⁾	8.5 ²⁾	8.2	9.5
身体的暴力の種類												
押す・こづく	40.8	30.8	33.3	44.3	30.9	35.0	40.0	34.9	25.0	36.5	36.0	47.2
つかむ	11.8	17.3	7.0	11.4	9.8	4.9	0.0	7.0	6.3	15.9	0.9	4.5
平手打ちする	10.5	10.6	24.6	7.9	19.5	23.6	0.0	16.3	32.8	7.9	24.6	6.7
殴る	3.9	12.5	12.9	5.7	7.3	0.8	30.0	0.0	1.6	4.8	11.4	9.0
蹴る	11.8	9.6	1.2	3.6	0.8	4.1	0.0	9.3	3.1	0.0	0.9	2.2
めった打ちにする	2.6	1.0	0.6	4.3	6.5	17.1	0.0	2.3	0.0	9.5	0.0	1.1
物を投げつける	14.5	9.6	8.8	8.6	7.3	1.6	20.0	0.0	14.1	6.3	2.6	2.2
物で打つ	2.6	1.9	1.8	2.1	6.5	1.6	0.0	20.9	4.7	0.0	1.8	0.0
脅す	1.3	4.8	4.1	5.7	4.1	7.3	10.0	7.0	7.8	11.1	0.9	0.0
その他	0.0	1.9	5.8	6.4	7.3	4.1	0.0	2.3	4.7	7.9	21.1	27.0
医療的処置の有無												
有りの比率	1.3	7.7	5.3	11.6	39.4	29.3	10.0	27.9	0.0	7.9	3.5	6.7
暴力時の飲酒												
どちらも飲んでない	74.7	67.0	62.7	58.0	64.7	61.9	20.0	39.5	84.4	73.0	73.4	74.2
相手のみ飲酒	4.0	28.2	4.1	20.3	11.4	19.7	30.0	60.5	1.6	15.9	8.3	14.6
自分のみ飲酒	17.3	0.0	4.1	2.2	13.8	5.4	30.0	0.0	10.9	7.9	1.8	2.2
両方とも飲酒	4.0	4.9	29.0	19.6	10.2	12.9	20.0	0.0	3.1	3.2	16.5	9.0

1) 米国は身体的暴力の種類が自由回答式であるため、代わりに同じ北米のカナダで代用。

2) missing value を「暴力なし」に含めている。

表 4 生殖家族での DV パターン別定位家族における暴力経験頻度

		N	Mean	SD	F	P
暴力目撃頻度	DV 加害者群	85	1.04	1.12	14.70	0.000
	DV 被害・加害者群	117	0.88	1.06		
	DV 被害者群	63	0.68	1.05		
	非 DV 群	1575	0.51	0.85		
暴力被害頻度	DV 加害者群	85	0.98	1.04	20.81	0.000
	DV 被害・加害者群	117	0.77	0.97		
	DV 被害者群	63	0.48	0.84		
	非 DV 群	1575	0.41	0.74		

か。もし「家族はこわい」、あるいはストレス発生の場でしかないなら、家族には近づかない方がいい、結婚しない方がいい、離婚した方がいいということになろう。さらに一部の家族療法家の言う、こわい家族の概念的構成物である「機能不全家族」の用語と使用法も、こわい家族の反転した幻想である「機能十全家族」を夢想させる、罪つくりな“青い鳥”物語である。

そこでここではまず最新データによって、現在でも人々は従前のように家族に期待を寄せているのかどうかを検討し、次いでその期待の根拠と推定される家族の示す保健機能に関していくつかの大勢的データを示してみたい。

(1) 「一番大切なもの」

「あなたにとって一番大切と思うものはなんですか。一つだけあげてください、なんでも構いません」との質問をした統計数理研究所(2004)の『国民性の研究(第11次全国調査)』によると、最近の議論、言説からすると意外な気がする結果が示されている。「家族」が45%で第一位で、それも第二位の「生命・健康・自分」21%、第三位の「愛情・精神」13%等々からすると群を抜いて大切なものと期待されているという。この調査では、調査員は調査票の質問項目に「こちらからは絶対に例をあげるな」と付記された指示によって誘導回答を厳しく禁じられており、こうして得られた自由回答はアフターコーディングで集計する

表5 「あなたにとって一番大切なものは」

	問	1 生命・健康・自分	2 子ども	3 家族	4 家・先祖	5 金・財産	6 愛情・精神	7 仕事・信用	8 国家・社会	9 その他	10 DK特になし	計
I (1953)	×											
II (1958)	29 129	22	11	12	3	15	16	7	6	1	6	99 (2, 369)
III (1963)	29	28	10	13	3	11	19	5	3	1	7	100 (2, 698)
IV (1968)	34	29	9	13	3	9	22	5	4	1	6	101 (3, 033)
V (1973)	K41	21	8	18	2	9	22	5	5	1	10	101 (3, 055)
VI (1978)	K32	23	7	23	1	6	27	6	4	1	3	101 (2, 032)
VII (1983)	K13	22	9	31	2	8	19	5	1	1	3	101 (2, 256)
VIII (1988)	K11	22	10	33	2	6	18	3	1	2	4	101 (1, 858)
IX (1993)	K10	17	10	42	1	4	16	3	1	2	4	100 (1, 833)
X (1998)	K10a	22	9	40	1	3	17	3	2	1	3	101 (1, 339)
XI (2003)	K10a	21	7	45	1	5	13	2	2	1	3	100 (1, 192)

注) 第10次(1998)調査では、本項目をアフターコーディングする際の分類基準の見直しを行い、第2次(1958)～第9次(1993)調査についても再集計を行った。このため、第2次～第9次の数値は、従来発表されているものと若干異なる。

出典：統計数理研究所(2004, p. 29)

方式が採用されている。表5はこの全国調査の結果を時系列的に配列比較したもののだが、ほぼ戦後の50年間で確実に人々の家族への思いが一貫して強まってきたことが読み取れる。一方「愛情・精神」は1970年代までは年々重視されていたものが、80年代になると急速に人々の心から退潮していったことが示され、「金・財産」もほぼ一貫して減少傾向にあると見てよいだろう。

従来日本人の家族満足感評価は「まあ満足」の回答を含めて、“家族”のマジックターム効果があったと疑われるほどに相当に高い水準を示してきた。そこで“家族”でなく“配偶者/パートナー”への満足感を聞いたもう一つの全国代表標本調査の結果を見てみると、男子回答者69.7%，女子回答者57.1%が「満足」と回答している（清水ほか，2004）。

(2) 家族選好の機能的実利

“こわい家族”になぜかくも多くの人が期待を

寄せるのか、不思議でもある。その疑問への一つの回答として、ここでは家族の示す保健機能ないしはストレス緩和の側面に注目し、①死亡率、②自殺率、そして③うつ傾向性について、婚姻地位 (marital status) 別に順次比較検討する。

①死亡率

結婚地位別のメンタルヘルス状況については元々精神的により健康な者が結婚に入るとする選択仮説と、未婚や離死別者にはディストレスが余計にかかりメンタルヘルス水準を低下させるためだとするストレス仮説が議論されてきた。結婚地位別死亡率の場合、入口でなく出口の論議のため選択仮説は妥当しにくく、結婚地位に伴うストレスが死亡成因により強く関わっていると見てよい。

図1は平成7年度における25歳以上人口における人口10万対の死亡率を、男女別・婚姻地位別に示したものである。未婚者と死別者は年齢構成上の偏りが大きく、これが死因にも強く反映し

図1 配偶関係別・疾患別死亡率
(25歳以上人口10万人当たり)

資料：厚生省，1997『平成9年人口動態統計』および厚生省，1997『婚姻統計』から作図

図2 婚姻地位別自殺率 (2000年)
出典：石原 (2003, p. 22)

図3 性別・配偶関係別抑うつ得点

ている。死別者は高齢者に偏在するため高い死亡率は常識的に理解されるが、健常者が多いはずの未婚者の場合男子では自殺と不慮の事故が、女子では心疾患、肺炎、不慮の事故、自殺などが有配偶を上回る未婚者死亡率となっている。有配偶と離別者では男女ともほぼ全死亡率において離別者の方に高い。この傾向性は長期的トレンドの点からも変化が認められず、未婚者や離別者に対する有配偶既婚者の健康上の優位性は明らかである(清水, 2000a)。

②自殺率

自殺に関しても基本的には死亡の場合と同じ傾向にある(図2)。男女ともに、ほぼどの年齢階層においても、有配偶者に自殺率が低い(石原,

2003)。従来わが国の自殺率は、昭和30年前後の若年世代の異常な高自殺率を除けば、高齢になるに従い自殺率を高めるという加齢効果で説明しえた。その後昭和50年代には中高年の自殺率が高まり始め、平成10年の“中高年男子自殺急増”現象をもたらしたが、この現象は昭和1桁から太平洋戦争開戦前に生まれたコーホートの動きによる世代効果の観点から相当部分が説明されるものである(清水, 2000b)。そうした自殺率トレンドとはまた別に、中高年男子の高い自殺率を支えている中核が離別者による自殺であることも図2からうかがえる。

③うつ傾向

これも世界的に広く使われているうつ傾向尺

度CESD (Center of Epidemiologic Depression Scale) を利用した研究結果(清水, 2001b)を図3に示すと, CESDの下位尺度である抑うつ得点(DPS)で有配偶者は男女双方で他のいずれの婚姻地位カテゴリーよりも低く, 特に男性は配偶者がいるとうつ得点は極端に低く, 配偶者を失うと極端に高いうつ得点を示す傾向を見せている。

4. 考 察

さて冒頭の自問に立ち帰って, ライフスタイルの選択肢の一つでしかない家族を多くの人々が敢えて選択する理由ならびに今後の見通しについて, 前項までの議論を踏まえて次の二つの観点から考えてみる。すなわち, 1) 社会システム論の視点から現代家族の意義として, また 2) 個々の現代人にとっての家族の意味という, 二つのレベルである。

(1) 現代家族の意義: 保健機能

第一に現代家族の意義であるが, 男女を通じて既婚者は離死別者ならびに未婚者よりも精神的健康状態が良好だとの一貫した調査研究結果は, 既に上で触れたうつの傾向や死亡率, 自殺率以外にも「過剰飲酒」や「怒り」の感情などについても確認されている。こうした家族の保健機能が女性よりも男性により多く享受されている (Gove and Tudor, 1973) というジェンダー的文脈に注意を払いつつ見ても, 育児の負担, 仕事と家庭の両立からくるディストレス等にもかかわらず, より良好の保健機能が女性も含めて既婚者グループに明瞭に観察されることに変わりない。既に1980年代の家族研究を振り返るJMF, Decade Reviewにて, ロスらは次のように述べている。「結婚は身体的健康, 心理的安寧, そして死亡率と相関する。離婚者, 別居者, 未婚者, 死別者に比して, 有配偶者は全般により安寧であり, このプラスの効果ははっきりしており, しかも一貫している」。(Ross, et al., 1990)

この事実を受けとめると, 「こわい家族」をスト

レス発生の場合とだけ捉えるのではなく, その家族がストレス緩和の場合ともなっていることに改めて注目し, そのメカニズムはいかなるものであるのか, といった検討課題が浮き上がってくる。既婚者家族が他の婚姻カテゴリーとはまた異なったあるいはより効率的なストレスへの対応, ストレスへの対処メカニズムを有しているらしいそのメカニズムを, 以下では社会システムの観点から考察する。大勢的検討を通じて浮かび上がるこのような傾向性は, 個々人には自覚されにくく, 個人から見るとむしろ社会システムの観点からの見たほうがとらえやすいからである。

まず即座に思い浮かぶのは, 選択肢化して相対的になったとはいえなお制度的家族が制度的であるゆえに有するアドバンテージ, 利得である。そしてこのアドバンテージが結果的にもたらす各種の安寧感である。本論で検討した保健機能など, 現代家族の実利的機能と意義の少なからぬ部分はこの点から帰結している。産業化する社会経済的過程にあっては家族における性別役割分業が全体的社会システムにはよりフィットするものであったがゆえに, 全体社会システムもこれを支持し各種の誘導的実利, 利得を整備した成果ともみなせるものである。

ただ, この実利はいかなる社会システム下にあっても, 主位的ライフスタイルには一定の程度において付与されるものであろう²⁾。なぜならば, 富裕化した現代とはいえ時間も空間もエネルギーも経験も無限ではありえず, つまりなんでもあり状況ではありえず, 「万人は万人に対して狼」であることをやめ人が他者と生きていく以上, 社会は何らかの程度と形で優先順位を伴う秩序化がなされなければならない点に変わりがないからである。なんでもありを認めうるのは, いかなる者も自己との差異を理由に絶対に他者を攻撃してはならないとする絶対公理, ならびにもし唯一他者への攻撃が許される場合があるとすればそれはこの絶対公理を逸脱して他者を攻撃侵犯した時のみであるという, 絶対規範が保証された条件下のみで

ある(内藤, 2001)。魅力的ではあるがこのきわめてロジカルなテーゼは、社会文化規範はもはや人々の動機をコントロールしえなくなっているとする昨今の脱規範化論議からしてもあまり現実的とはいえない、むしろ最高道德規範を指し示すものと理解される。

いずれにせよ、家族を単位とする社会システム設計に代わって個人を単位にする社会システムを構築すれば、各種の個人的ライフスタイルにおいて個人および家族の保健水準が今より高くなることが十分に期待される。したがって中長期的には、現行の家族スタイルの生活者にとっては従前のようなより優位なアドバンテージは期待しえなくなる。このポリティクスの中で、自己との差異を理由に他者を攻撃してはならないとする絶対公理と現実の社会システム資源の有限性との間で綱引きが続くだろう。

(2) 人々にとっての家族の意味

①自分物語とコンボイ

“宗教や政治的結社、家族を含めて絶対的、集合的、規範的、標準的なアイデンティティ付与エージェントあるいは対象物が衰微する”という過程がポストモダンの個人化の状況とされるならば、いったいこれからの人間はなにを自らのアイデンティティの拠り所としていくのだろうか？ 次なる、あるいは代替的な拠り所の例示としてペットや植物などが挙げられたり、宇宙や終末世界そして人間存在の意味を開示してくれる新たな宗教などが挙げられる。しかし考えてみれば、今後ますます標準的なアイデンティティ付与エージェントといったものは考えにくくなるとすると、ポストモダンの個人化状況にあってはアイデンティティ付与エージェントが個人によって何でもよいということであり、問題はそれぞれのエージェントや対象物がその人にとってどのくらいの実効性を有しているかが問題となるだけともいえよう。将来的にはヘビでもカメでも植物でも、あるいは同性や異性の相手や家族でも、極論すればイワシ

の頭でもよいのである。

その中で現代において人々が選択するアイデンティティ付与エージェントは、各種調査結果からみて今のところ家族が一番人気と解釈するのが順当だろう。たとえそれがギデンス (Giddens, 1992 = 1995) のような意味でのヒトを対象とする共依存的関係であったとしても、あるいは他の有力な選択肢がないから家族にしておこうといったものでも、筆者はそれはそれでいいと考える。なぜそう考えるかといえば、標準的な規範や象徴が影響力を持てないポストモダンの個人化状況では、それをいいとか悪いとかとやかくいう根拠は極端に小さくなってしまからである。純粋な関係性という規範的、楽観的な期待も、ポストモダンという多くの個人が規範的にアトム化している状況ではやはり「青い鳥」風の議論でしかない。あるいは強者の議論といってもいい。私を含めて多くの一般人はそうした期待を現実化できるほどには強くも賢くもない。

さらに日本では、甘えの構造(土居, 1971)、人と人之間(木村, 1972)、間人主義(浜口, 1982)といった人間関係の特徴的な文化的パターンとして色濃く保持してきたところから、変わりつつある人間関係文化の過程とはいえ、「強いられた自立」でも「一方的な依存」でもない相互に依存しあう関係性は、どうやら日本人にはなお居心地がいいと感じられる人間関係パターンのように思われる。結婚せずにあるいは経済的に独り立ちできずに長く親元にとどまる若者たちとその親との間には、社会経済的条件のほかに、この相互依存の居心地の良さを見て取ることができる(宮本ほか, 1997; 宮本, 2004)。

こうした人間関係性の再評価は自助文化の伝統が指摘されてきたアメリカでさえも注目を集めだしている。他者との境界を設定し自身の自我境界を強化することを通じて自己を確立することが自己発達、自立と理解してきたこれまでの自我発達論は男性中心の競争的、分断的社会システムには適合していても、他者への共感や思いやり、依存

しあうこと、支援しあうことを評価し受け入れることが苦手で、共依存的であるとか女性的であると問題視する傾向が続いてきたというのである。こうしたジェンダー的議論を交えて、サレイやスローベン (Surrey, 1985; Slove, 1991) は前者を「自立による自己確立 (self-by-independence)」, 後者を「関係性を通じた自己確立 (self-in-relation)」と区別して、女性に多いとされてきた共依存的関係傾向を積極的にリフレーミングして見せた。

自己アイデンティティと他者との関係性を楽観的に見たり悲観的に論じたりする立場もあっていいが、個人が受け入れれば何でもありの時代を想定するとなると、楽観も悲観もする必要もないだろう。時間と経験の流れにおいてみると、私たちごく「普通の人々」とってはアイデンティティや自分らしさの手がかりは、決して青い鳥のようではなく意外と手の届く身近にあるのではなからうか。「この人がアル中になったお陰で…」という語りは鮮やかにこのことを示唆している。

ごく簡単に見たデータからもうかがえたのは、不安と極限の疲労からくる体調不良、社会からのそしてそれを自分の中にも取り込んだ偏見からの非難と困惑、相手に対してのみならず自己選択の不首尾に対する自らへの怒りと自己憐憫、何度も頭をよぎった相手と自身に対する殺意、離婚騒ぎの繰り返し等々である (清水, 1992)。こうした甚大な家族ストレスを超えて、いつの間にか「アル中」という否定的ラベリングを自己受容するプロセスは、レッテルの拒否 (denying) と引き剥がし (delabeling) の段階を経て、やがてレッテルの受容 (relabeling) へと移行してゆく (Trice and Roman, 1970)。この段階に至るまでには、上記の否定的体験と感情に彩られた自分物語を書いては消し、消しては書きの繰り返しがある。そうした複層的で時間の前後する繰り返しの中で、経験的、時間的熟成によって (としか考えようがない)、これまでの自分、家族、相手、子どもなどの意味が変容して、トータルには自分の人生の意味の再発

見ないしは再秩序化へと至るのである。シンボルを喰う動物である人間は、自死 (自殺) の場合以外は何かして最後に自分と折り合いをつけてみせるのであろう。それも時間と経験の蓄積の中で。

その際、アイデンティティの手がかりはヘビやカメでも、はたまたイヌやネコでもよし、いわゆる標準的家族でも同性愛でも非婚でもよし、必要に応じてセラピーも宗教もある。そうした中で観客の動機と識者の解釈は様々ながら、アイデンティティ・ゲームの一番人気は大枠家族というところが、現代家族の「意味」的側面であろうと考える。時には対立・葛藤やこわい家族の側面を交え包み込みつつ長期にわたる関係の中で時間と経験を様々な形で共有したコンボイ (人生の道行き仲間・同行集団: 自分物語の重要なオーディエンスと理解者)、わけても中核的コンボイ (pivotal convoy: 自分物語にとって不可欠で決定的に重要な主役の一人) が見つかりやすいのが、この一番人気を根強く支えているものと思われる。

ただし一番人気がいつも勝つとは限らない。二番、三番人気、あるいは「この人がアルコール依存症になったおかげで」が大逆転することも少なくない。そもそも誰が勝者だなどという議論は不毛であり、現代では中核的コンボイの態様は多様である。上述したことは、その中で確率論的議論ということになる。

②サバイバー体験は必要か?

ところで、アルコール依存症者を抱える家族など、一般的なあるいは標準的な家族の議論からすれば特殊に過ぎて通常家族社会学会で議論される家族論議には当てはまらないのでないかとの疑問もあろう。

筆者も自分物語を構成する上で家族ストレスの極限状況を経験した方がいいとか、ましてや必要だとか、さらには自分物語の構築にとって家族が唯一かけがえのないものだと言っているのではない。「こわい家族との関わりがサバイバーとして

の自己確認にとって意味があるか」との、当日のフロアからの質問は、意味の有無だけから言えば YES & NO と答えるしかない。その「意味がある場合」といえば、同義語反復的になるが、時間と経験の蓄積によって「意味ある体験」として意味づけられた場合である。さっさと離婚してそれまでの不幸で惨めな自分物語に、別の物語を上書きしてしまえば、それに越したことはないだろう。それができればである。ただ誰もが忌避したいそうした体験を、上書きもできず、かといって否定的なままに放置することもできないことも少なくない。筆者の臨床的研究で出会った人にはそういう方々が多かったといってもよい。自ら望んだわけではないものの、「こわい家族」を生きたのは紛れもなく自分であり、「この人がアル中になったお陰で…」(見えなかったものが見えてきた?) という、こわい家族の実態からすれば簡単には信じられないせりふが口をつくのである。

ここで言いたいのは、たとえば介護ケアという同一機能を誰にやらしてもらうかによって意味が違ふという、やや一時点的、短期的な意味論議でなく、様々な経験と時間の熟成によって「こわい家族」でさえも全く異なる意味が付与される(もちろん意味づけの論理階梯は異なるだろうが)という事実である。家族ストレスの極限状況を生き抜いてきた人にとってもそうであるならば、一般的な家族を生きてきた人にとっても、時間と経験の熟成が加味されるならば、家族は自分物語の素材、源泉としてなお有力な手がかりを提供するものといえよう。繰り返しになるが、多くの人がお家族の世界に関心を寄せる事実、前述した機能的意義に加えてこうしたアイデンティティ問題に関する意味付与を、決して排他的、独占的ではないものの家族がなお有力なエージェントとして提供するものとみなしているからだと理解するのが筆者の立場である。

(3) 現代社会と家族の意味：私事化と高齢社会における家族コンボイ

家族がなおアイデンティティ付与において有効なエージェントであり続けるだろうとの予測は、いまだし一般的な観点からも考察されうる。以下に、現代社会を特徴づける私事化と高齢社会という二つの動向からさらに検討を加えてみる。併せて時間と経験の蓄積、熟成に関しても私見を述べてみたい。

いうまでもなく、私事化とは公的領域から私的領域が分離し始め、この私的領域では個人の裁量権、選択権がしだいに増大、重視されていく過程であり、特に家族という生活の場においては情緒的関係性が重視されるメンタリティを伴う。一方、近代社会以降個人が漸進的に獲得、拡大してきたこの自由裁量権は、逆説的に究極の自由の重さを人々に負荷し始める。この社会事象は、ワイマール共和制の崩壊とユンカーたちのナチズムへの迎合を分析したフロム(Fromm, 1941=1951)の「自由からの逃走」や、当事者による自由な解釈と意味づけがむしろ個人にとっては重荷となり始め目標喪失やアノミックな状況に浮遊する「故郷喪失者」をみたバーガーら(Berger, et al., 1973)によって、見事に浮き彫りにされている。そして現在私たちは、インフォームド・コンセントによって難解な手術法の比較と致死リスクの確率を説明され、あなたの責任で選んでくださいと専門家から“究極の自由”を迫られ困惑している。そればかりか、宗教や共同体から離脱して得た個人の自由裁量権との引き換えに、生老病死の意味さえも、自ら定義し意味づけなければいけない(=意味づけしてもいい)、というアンビバレンスに陥っている。しかし生きること、死ぬことを個人でどう意味づけるのかは、“悟り”のような難問であると言うしかない。ライフコースの折々で出会う大きな生活出来事の連続性、すなわち人生についても同様である。ましてや高齢社会となり、人類未曾有の多数の人々が、自分の人生とは何だったのかという問いを抱え込みながら、長期にわた

る高齢期を生きていかねばならないのが現代の状況である。

こうした状況において、私たちは結局自分との折り合いをどうつけ得るのかという、いわば自分物語の構築課題に直面することになる。それもロビンソン・クルーソーやアヴェロン野生児でない限り、その構築作業は他者、それもヒトとの関わりを通してしかありえないことは、エリクソンをはじめこれまでのアイデンティティ論議の示すところでもある。とはいえ極端な嗜癖システム論を展開するシェフ (Schaefer, 1987=1993) ならばいざ知らず、自らのアイデンティティの確認のために他者を必要とするという事態を、ギデンス風の意味における共依存的関係 (生きる上での安心感を維持するために、自分が求めているものを明確にしてくれる相手が必要としている人の人間関係) だと鑄型にはめ込むような理解をする必要はない。プラース (Plath, 1980=1985) のいう“成熟のレトリック”に示される「確認」「正当化」「予測」というコンボイ仲間との間で行われる自分との折り合い付け作業は、強迫的な愛情やセクシュアリティとは異なり距離調節が可能な親密さであり、相互に交錯しあうライフコースという時間と経験の奥行きを共有しつつ自分物語を織り上げていく関係性である。

関係性の歴史とも形容されるこのようなコンボイ仲間の中でも、自分物語の構築には欠かせない間柄ないしは関係性の中核に夫婦や家族の関係性が位置づけられる。ライフサイクルによっては、あるいは人によっては、この中核的コンボイはより多様で、戦友や同窓生、各種の同志、あるいはきょうだいや旧知の近所仲間であるかもしれない (吉原, 2003)。一方、私事化と高齢化を背景に現代になるにつれ、時間と経験の奥行きを共有しつつ自分物語を織り上げていく関係性、すなわち中核的コンボイ (pivotal convoy) は、夫婦・パートナーや家族的関係にある人間関係に求められやすいといえよう。私事化が、さらには個人化が進行する社会状況では、自己定義も個人的事柄の性質

を強めるからである。これが、多様なライフスタイル論が喧伝される一方で、短中期的には人々があいも変わらず家族に「一番人気」の多大な関心を示す状況的背景と考える。

【注】

- (1) DV における最近の傾向の一つは、暴力定義の外延的拡散である。当初は「殴られた人にけがを与える可能性の高い行為」(Straus, et al., 1980=1981) と定義された身体的暴力、とりわけ L. Walker (1979=1997) 風にいえば偶発的ではない「少なくとも2回以上の虐待のサイクルをする」繰り返される激しい暴力が論議的であった。しかし、DV 被害の実態がしだいに明らかにされるに従って、口を聞かず無視するあるいは「誰のお陰で食べられると思っているんだ!」と大声で脅すなどの精神的、心理的暴力から生活費を満足に渡さない経済的暴力、手紙・電話を監視する社会的暴力、そして嫌がるのにポルノを見せるなどの性的暴力等々へと拡大していった。これが本調査では従前からの行政調査などより高い DV 申告率ならびに男女間の被害加害の双方向性ないしは対称性をもたらしている背景と考えられる。
- (2) 現在、各種の社会サービスや手当で、税率など、主位的・制度的な家族ライフスタイルが有するアドバンテージ (システム・フィットネス) をめぐる異議申し立て、再調整が進行中だが、ある社会システムにおける多様性の幅の増大 (フィットネス・レンジの拡大) が一段落すると、以前よりはシステム・フィットネス水準は一極集中ではなくなるものの、それでも社会システムがゆえに何らかの一群のライフスタイルを想定しない限り社会計画はありえないと考える (清水, 2000a)。したがって、システム変革の次段階では先のフィットネスレンジの拡大は、いずれかの時点で再調整局面を迎えることが想定される。

【文 献】

- Berger P. L., Berger B., Kellner H., 1973, *The homeless mind: Modernization and consciousness*, Random House. (高山真知子, 馬場伸也, 馬場恭子訳, 1977, 『故郷喪失者たち』新曜社).
- 土井健郎, 1971, 『「甘え」の構造』弘文堂.
- Fromm E., 1941, *Escape from freedom*, Holt, Rine-

- hart and Winston. (日高六郎訳, 1951,『自由からの逃走』東京創元社).
- Giddens A., 1992, *The transformation of intimacy: sexuality, love and eroticism*, Polity Press. (松尾精文, 松川昭子訳, 1995,『親密性の変容—近代社会におけるセクシュアリティ, 愛情, エロティシズム—』而立書房).
- Gove W. R., Tudor J. F., 1973, "Adult sex roles and mental illness," *American Journal of Sociology*, 78: 812-835.
- 浜口恵俊, 1982,『間人主義の社会 日本』東洋経済新報社.
- 石原明子, 2003,「統計からみる日本の自殺—人口動態統計人口動態職業・産業別統計より—」『精神保健研究』49(Supplement): 13-26.
- 木村 敏, 1972,『人と人との間—精神病理学的日本論—』弘文堂.
- 宮本みち子, 2004,『ポスト青年期と親子関係—大人になる意味と形の変容—』勁草書房.
- 宮本みち子, 岩上真珠, 山田昌弘, 1997,『未婚化社会の親子関係—お金と愛情に見る家族のゆくえ—』有斐閣.
- 内藤朝雄, 2001,「自由な社会の構想と臨床社会学」『現代の社会病理』16: 1-18.
- 信田さよ子, 2003,『愛しすぎる家族が壊れるとき』岩波書店.
- Plath D. W., 1980, *Long engagements: Maturity in modern Japan*, Stanford University Press. (井上俊, 杉野目慶子訳, 1985,『日本人の生き方—現代における成熟のドラマ—』岩波書店).
- Ross C. E., Mirowsky J., Goldsteen K., 1990, "The impact of the family on health: The decade in review," *Journal of Marriage and the Family*, 52(4): 1059-1078.
- 斉藤 学, 1997,『「家族」はこわい—母性化時代の父の役割—』日本経済新聞社.
- Schaef A. W., 1987, *When society becomes an addict*, Anne Wilson Schaef. (斉藤 学監訳, 1993,『嗜癖する社会』誠信書房).
- 清水新二, 1992,『アルコール依存症と家族』培風館.
- 清水新二, 1998,「家族問題・家族病理研究の回顧と展望」『家族社会学研究』10(1): 31-83.
- 清水新二, 2000a,「現代家族の危機とノーマライゼーション」清水新二編『シリーズ 家族はいま 4 家族問題—危機と存続—』ミネルヴァ書房, 292-313.
- 清水新二, 2000b,「退職前のストレス—平成10年の自殺率急増をめぐる時代効果と世代効果—」『ストレス科学』14(4): 222-230.
- 清水新二編, 2001a,『共依存とアディクション—心理・家族・社会—』培風館.
- 清水新二, 2001b,「配偶関係, ジェンダーと心身ディストレス—CESD(うつ傾向尺度)得点の分析—」清水新二編『現代日本の家族意識』日本家族社会学全国調査(NFR)研究会, 47-66.
- 清水新二, 金 東洙, 廣田真理, 関井友子, 服部範子, 宋 龍啓, 上田友香, 崔 延臣, 2004,『ドメスティック・バイオレンスに関する多国間国際比較研究』(平成13年度~平成15年度科学研究費補助金研究成果報告書).
- 庄司洋子, 波田あい子, 原ひろ子編, 2003,『ドメスティック・バイオレンス 日本・韓国比較研究』明石書店.
- Sloven J., 1991, "Codependent or empathically responsible?: Two views of Betty," In Bepko C. (ed.), *Feminism and addiction*, The Haworth Press, 195-210.
- Straus M. A., Gelles R. J., Steinmetz S. K., 1980, *Behind closed doors: Violence in the American family*, Anchor. (小中洋太郎訳, 1981,『閉ざされた扉のかけで—家族間の愛と暴力—』新評論).
- Surrey J. L., 1985, *Self-in-Relation: A theory of women's development*, Stone Center Working Paper Series 13, Stone Center.
- 統計数理研究所, 2004,『国民性の研究 第11次全国調査—2003年全国調査—』(統計数理研究所研究リポート 92).
- Trice H. M., Roman P. M., 1970, "Delabeling, relabeling, and alcoholics anonymous," *Social Problems*, 17: 538-546.
- Walker L.E., 1979, *The battered women*, Harper & Row. (斉藤 学監訳, 1997,『バタードウーマン—虐待される妻たち—』金剛出版).
- 吉原千賀, 2003,「高齢期におけるきょうだい関係—活性化とその要因—」『家族社会学研究』15(1): 37-47.